

# 日本スポーツ社会学会会報

Vol. 32

## *Sport Sociology*

【目 次】

第11回大会特集	1
「日本学術会議」懇談会報告	28
編集委員会より	30
理事会総会報告	32
事務局連絡	37
会員動向	38
編集後記・事務局住所	41

日本スポーツ社会学会

Japan Society of Sport Sociology

事務局 立命館大学 2002年7月

事務局より2002ブサンスポーツ科学会議のお知らせ

ブサン・アジアゲーム開催にあわせ9月24日から27日にかけて、スポーツ科学会議が開かれます。

要綱が事務局に届きましたので同封いたします。詳しい情報は同封要綱中のホームページにアクセスに掲載されておりますのでそちらをごらんください。

なお、報告を予定される方は、締め切りが近づいておりますので早急に開催事務局にご連絡ください。

以上ご案内まで



2002

BUSAN ASIAN GAMES  
SPORT SCIENCE CONGRESS

- Peace and Prosperity of Asia through Sports -

September 24~27, 2002

Dong-A University

POCARI SWEAT

www.sportscongress.org

CONGRESS PROGRAMS

Keynote Speech

Peace and Prosperity of Asia through Sports

Symposium

Symposium I. Sport in the Multicultural Era

Symposium II. Exercise and Nutrition

Disciplinary Sessions

Organizing committee accepts papers (in English) on behalf of 16 disciplinary sessions. Sessions are divided into oral and poster sessions.

Korean could be used in presentation in addition to English which is the official

	Disciplines		Disciplines
1	History of Physical Education	9	Sport Physiology
2	Sport Philosophy	10	Exercise Nutrition
3	Sport Sociology	11	Measurement & Evaluation of P.E.
4	Sport Psychology	12	Special Physical Education
5	Sport Pedagogy	13	Dance
6	Sport Industry · Management	14	Growth and Development
7	Sport and Leisure Studies	15	Sport Biomechanics
8	Leisure and Recreation	16	Exercise Prescription

Related and Special Programs

• **Related Programs** : Includes meetings hosted by international and regional organizations during the congress. Any organization who will have meeting during the congress should inform the Organizing Committee. Room will be provided upon request.

• **Special Events**

- International goodwill events : sea swimming (2km, Haeundae), golf, tennis, indoor swimming.
- Social events : welcome reception, banquet
- Culture and art events : dance performance, Korean traditional music performance.
- Exhibitions : sports science equipments, sports-related products, books, sports wear, photos.
- Tour : Busan Metropolitan City tour, Kyungju tour (upon request)

## HOTEL ACCOMMODATION

### Rates

US \$100(Busan Tourist Hotel), ₩10(Hotel Paragon) and \$141(Commodore Hotel)

### Reservation

The reservation section of registration form in home-page should be completed by Aug. 31, 2002. Any change or cancellation of the reservation should be notified before the 7th of September

## SUBMISSION OF MANUSCRIPTS

The Committee receives papers in the form of an original research effort. Any experts working in the field of sports-related areas are eligible to submit one or more papers.

### Guidelines for manuscripts

1. A completed paper may consist (in the order) of its Title, Author, Abstract, I. Introduction, II. Methods, III. Results, IV. Discussion and Conclusions, and References.
2. The cover page should include the title of the presentation, disciplinary area, name of author(s), highest degree earned, institutional affiliation, current position, phone number, fax number and E-mail address.
3. The abstract should not exceed 300 words.
4. The title should be centered in Times Roman, 12pt.
5. The name of the author(s) should be centered in Times Roman, 11pt.
6. The abstract, text, references and footnotes should be typed in Times Roman, single spaced, 11pt. Margins should be 1 inch on the top, from the bottom, to the right and left.
7. Clearly printed pictures should be attached to the draft so that they could be used first hand. The use of a black and white photo or film is recommended.
8. For tables, horizontal lines are recommended.
9. The title of the table should be given at the top of the table, and the title of the picture at the bottom of the picture.
10. If table and picture are cited, reference should be at the bottom.
11. Format should follow the American Psychological Association or the American College of Sports Medicine Reference Styles.
12. Manuscript should be typed on A4 paper(210×297mm)with Microsoft Word 2000. Manuscripts must not exceed 10 pages.

### Submission deadline

- Completed manuscript with abstract should be E-mailed to the Committee by August 10, 2002.

### Presentation guidelines

1. In oral presentation, presenter will have 15 minutes for presentation and 5 minutes for discussion.
2. In poster session, paper will be posted on the board following the schedule.
3. It is required that author(s) attend the Congress to make the presentation.



\* Any questions regarding presentations, feel free to contact the Committee listed below.

2002 Busan Asian Games Sport Science Congress Organizing Committee,

College of Physical Education, Dong-A University,

#840 Hadan-2 Dong, Saha-Gu, Busan 604-714, Korea

Phone: 82-51-200-7862-3. Fax: 82-51-200-7864

<http://www.sportscongress.org>

E-mail: 2002@sportscongress.org

## IMPORTANT INFORMATION

- Deadline for submission
  - August 10, 2002
- Registration for the Congress and hotel
  - August 31, 2002
- Deadline for registration for related events, international goodwill events and tour
  - August 31, 2002
- Change or cancellation of the reservation
  - September 7, 2002
- 2002 Busan Asian Games Sport Science Congress
  - September. 24 ~ 27, 2002, Dong-A University
- Related Web-sites
  - 2002 Busan Asian Games Sport Science Congress Organizing Committee  
<http://www.sportscongress.org/>
  - Dong-A University  
<http://www.donga.ac.kr/>
  - Korean Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance  
<http://www.kahperd.or.kr/>
  - 2002 Busan Asian Games Organizing Committee  
<http://busanasiangames.org/>

## 21世紀スポーツのキーワード 講座 現代文化としてのスポーツⅡ スポーツ／メディア／ジェンダー

鈴木守・山本理人 編著 A5版248頁 本体2600円

高度化と大衆化の二つのベクトルを持ちつつ日々成長しつづける現代スポーツ。本書でとらえた「メディア」と「ジェンダー」という視点は、21世紀のスポーツ文化を読み解く上でのキーワードとして、ますますその重要度を増していくものと考えられる。スポーツの持つメディア性、身体運動の文化と社会的／文化的性差との関わり等々について、多様な切り口から分析する。

### 【主要目次】

- I スポーツ／メディア  
1 テレビメディアの特性とスポーツ文化 ※ 2 テレビ放送とスポーツの商業化 ※ 3 スポーツとジャーナリズム ※ 4 スポーツヒーロー論 ※ 5 スポーツイベントのメディア力 ※ 6 英国スポーツ文化論 ※ 7 イギリス人とフットボール ※ 8 近代文学とスポーツ
- II ジェンダー／スポーツ  
9 ジェンダーと社会 ※ 10 ジェンダーと“こころ” ※ 11 青年期のジェンダー ※ 12 ファッションとジェンダー ※ 13 文学の中のスポーツとジェンダー ※ 14 近代スポーツとジェンダー ※ 15 マスメディア・ジェンダー・スポーツ

## メディアとスポーツ、生涯スポーツ、スポーツ産業など、現代スポーツの諸相を探る スポーツ文化の現在（いま）

講座 現代文化としてのスポーツ / 鈴木守・山本理人 編著 / A5版266頁 本体2600円

豊富な図表資料、保健体育テキストに最適

## 大学生の健康・スポーツ科学

大学生の健康・スポーツ科学研究会 編 B5版216頁 本体2400円

心身ともに健康で、生き生きとした日々を送るにはどうしたらよいか？  
現代社会における運動・健康・スポーツの意味について、各分野の専門家が概説する。

日本柔道の原点を見つめ、将来の発展に立ち向かう

## 柔道の視点——21世紀へ向けて

竹内 善徳 編著 / 柔道指導者研究会 編 A5判244頁 本体2800円

I 歴史と文化 / II 教育と指導 / III 競技と強化 / IV 強化と科学の各章を、研究・指導の最前線にある専門家が担当。新たな概説書が誕生した。柔道人の必読の書！

〒171-0042 東京都豊島区高松 2-8-6

道 和 書 院

TEL (03) 3955-5175

FAX (03) 3955-5102

## 第11回大会特集

日本スポーツ社会学会第11回大会を終えて

福岡大会実行委員長：西村 秀樹（九州大学）

花冷えのする肌寒い天候にもかかわらず、約130名の参加者を迎えることができました。参加者の皆様に厚く感謝申し上げます。

今大会は、一般発表が36演題と例年をはるかに上回り、大会事務局で予定していた「公開フォーラム」を取りやめざるを得なくなりましたが、学会会員の研究の活発化ということで非常に喜ぶべきことと思います。一演題20分の発表につき個々に10分の質疑応答の時間を設け、一演題ごとに完結していくかたちをとりました。討議の集中化と深まりをねらいました。

W. Kelly氏の日本のプロ野球の組織的体質を言及した講演は私たちに興味深いものでありましたし、最後のテーマセッションも二つの会場とも座る席に困るほど満杯になっていました（これは運営上の反省点でもあります）。「身体」「ワールドカップ」といった学会やスポーツ界の関心・時勢をとらえた学会事務局並びに演者の方々の着眼のすばらしさによるものと存じます。マスコミからの問い合わせや取材もございました。

運営の点におきましては、広告料を集めて資金を増やすという考えは捨てて、自らの労力を費やして安上がりにあげるという方針で取り組みました。ただ、幸運なことに、私たちが協力講座として参画している九州大学大学院人間環境学府・研究院の後援を受けることができ、資金面での援助を得ることができました。この後援を受けるということは、今後の学会の開催に際して、一つの方策として有効であると言えます。

大会の運営に不慣れで、いたらぬところが多々あったことと思いますが、一応の責任を果たしたというところで、委員一同安堵しております。

最後に、今大会をおひきたて下さいました学会事務局の方々並びに会員の皆様に心より御礼申し上げます。

## 特別講演

### Failure in Sport: Accepting Disappointment In Japanese Professional Baseball William W. Kelly (Yale University)

杉本 厚夫 (京都教育大学)

今回の特別講演は、エール大学文化人類学のケリー教授を迎え、日本のプロ野球は失意 (Disappointment) をどのように受けとめるのか、という非常に刺激的なテーマでお話しを頂きました。

ケリー教授の講演は、連敗の続く阪神タイガースをフィールドとして、なぜ、敗北してもファンは減らないのかという問題提起から出発します。そして、その敗北を受け入れるファンたちの論理を明らかにしていきます。

まず、負けはスポーツの世界では日常的に起こりうるものです。その中でも、解雇や引退といった決定的な敗北や連敗といった慢性的な敗北も存在します。これらについては、なぜ敗北したのかという説明 (failure talk) が必ず加えられることとなりますが、それは、単要因として語られるよりは、むしろ複合的に述べられることが多いのです。その要因としては、1) リーグ戦のように、敗者にも勝つチャンスがもう一度与えられるスポーツに共通するシステムが負けを認めること。2) 野球は繰り返しのあるスポーツで、常に、次のチャンスを巻き返すことが可能になる特性を持っていること。3) 決定的な敗北にならないように、努力や練習が足りなかったという理由を好む日本的な体質を持っていること。4) 阪神タイガース独自の論理として、「生え抜き主義」「甘やかし」「第二都市としてのコンプレックス」があること。などが考えられます。

そして、このような理由によって説明される敗北は、スポーツの合理性の中心にあるウェーバー的な非合理性であると言えるでしょう。

この講演に対して会場からは、ひょっとすると、ジャイアンツのように合理的な野球をモデルとした日本の近代化に対する反感のようなものが、阪神タイガースへの共感となって現れているのではないかという意見もありました。

そして、今年の阪神タイガースは勝てそうですかとお伺いした時、ファンの一人としては勝って欲しいけど、研究者としては負けてくれないと研究材料にならないと、ユーモアたっぷりに答えられたのが印象的でした。この時は、まさかタイガースが、開幕7連勝をするとは想像だにできなかったでしょう。

流暢な日本語で講演されるケリー教授に、会場は終始和やかな雰囲気、文化人類学のマジックにかかったように、敗北に伴う暗いイメージは微塵も感じられませんでした。また、機会があれば、強くなったタイガースの文化人類学的な考察をお聞きしたいものです。

## ■テーマセッション1

### 「日韓ワールドカップとメディア」

黒田 勇 (関西大学)

研究プロジェクト「日韓ワールドカップとメディア」の一年目は、メディアがいかにワールドカップを語っているのかに焦点を当て、三人の報告者とコメンテータに発言を求めた。本セッションはW杯を目前に控え、会員ばかりでなく、マスコミ関係者やJリーグなどのサッカーの現場の人たちも集まり盛況のうちに開催することができた。

まず、小笠原博毅会員 (ロンドン大学ゴールドスミス校) は、「イギリスのメディア言説に見る2002年W杯と『ポスト・コロニアル・メランコリア』」と題して、「ポスト・コロニアル・メランコリア」という概念を手がかりに、おもに英国の新聞言説によって、イングランド代表の今回のW杯への足跡を、対ドイツ戦を軸に時系列的に辿り、帝国主義的な過去の「栄光」の記憶がイングランドのサッカー文化の歴史と現在と折衝している過程と、その折衝過程における階級、人種、国民、ジェンダーのアーキタイプの変容について考察した。

次に、森津千尋会員 (同志社大大学院) は、「韓国テレビのW杯表現 ～「市民文化運動」広報番組の意味するもの」と題して、韓国のテレビ番組『出発2002ワールドカップ』の内容分析から、韓国にとってのW杯とは何かについて考察した。韓国ではW杯を市民意識、文化水準の向上など、韓国社会の「向上」と知名度を上げるナショナルイベントとして位置づけている傾向を明らかにし、それに対する市民の反応を分析した。

さらに、ファン・ソンビン会員 (立命館大学) は、「スポーツ報道における日韓相互イメージについて」と題して、日韓の相互イメージ研究の動向を整理しつつ、これまでの日韓におけるスポーツ中継・報道 (例えば、サッカーの日韓戦、日本プロ野球における韓国選手活躍) と、より一般的なメディア文化の中の「韓国ブーム」に基づく韓国表現についての内容分析を行い、お互いにある相手国・相手国民に対するステレオタイプ表現とその変化、また日本の側に見られる、ある種のオリエンタリズムのまなざしなどを明らかにした。

また、ルシアナ・ビエラ会員 (滋賀大大学院) は、サッカーのサポーター文化、報道の仕方について、日本、ヨーロッパ、ブラジルを比較しながら、スポーツジャーナリストとしての経験からコメントを述べた。

フロアからは、日韓のW杯の捉え方の違いや、日本における韓国イメージの構成とその変容について関心が集まり、多くの質問と意見が出された。また、イングランドの事例について、「大衆紙」を素材としていることについて、その実証性の問題などが疑問として出されたが、その方法論の違いについての議論は深めることができなかった。

## ■テーマセッション1

### 「日韓ワールドカップとメディア言説」に参加して

田中研之輔（一橋大学大学院）

小笠原博毅氏、森津千尋氏、黄盛彬氏による本セッションは、「日韓W杯」がメディアによっていかに語られ表象＝代理表出されてきたかについてそれぞれの「位置性（ポジションナリティ）」を十分にいかした報告で大変興味深いものであった。

小笠原氏は、イングランドのメディア言説をP. ギルロイの「ポストコロニアルメランコリア」という概念枠組みを援用しながら分析した。そこから、66年の栄光を頂点に継り付き逃れないメンタリティーを持つイングランドのサッカー文化の特徴と、「日韓」が西洋側のまなざしから単一に他者化され空虚な「アジア」として想像されている現状を報告する。そして、W杯が1) 今後ますます巨大な広告収入や衛星放送の放映権を塊としたグローバルキャピタリズムの戦略の一つに位置付けられ、2) 選手の身体が物象化された単なる商品となり、3) サポーターも単なる消費者として扱われる、ような自体に異議を唱える。結論として、W杯にも象徴されるように現代社会におけるグローバルな空間の搾取に対して、地域性や固有性を掲げるだけでなく「プラネタリー」な戦略で対抗していく必要性を述べた。

森津氏はW杯を控えた韓国国内の状況をW杯関連番組の詳細な内容分析をもとに報告した。そこで、従来の韓国論で語られた先進・上昇志向が市民運動協議会や道徳的キャンペーンなどに何うことができる中で、「ウリ（私達）」よりも「ナ（私）」を優先する新たな文化的状況が自発的にうまれてきているとする。韓国における日韓共催W杯の成功は、日韓関係を和解や交流としてではなく、日本への「ハンプリ（憧れをとく）」が人々の認識にみられるようになることであると述べた。森津氏によるとW杯を控え韓国国内で公共空間のマナーの改善を図る社会整備が行われているという。ここでは駅前や公共の広場で生活している「野宿者」の管理や排除をW杯の風紀整備の一環として強化している日本国内の現状についてあえて指摘しておきたい。

黄氏は日韓のメディア言説の比較から「政治・文化・経済」のW杯を語る韓国、「放映権・フーリガン対策・サッカー」のW杯を語る日本、という特徴を浮かび上がらせる。さらに、黄氏は日本と韓国とのメディア言説にみられる共同開催のパートナー（他者）像に注目する。なかでも、日本のメディア言説において自国のナショナリズムが語られることなく観察対象として韓国のナショナリズムが強調される現状を問題視した。最後に、日本と韓国がW杯の共同開催を通して西洋諸国や他国から「アジア」として認識される共通体験を通して、自国における他者の語りがどのように変化するかについて継続的な分析の必要性を述べた。また、研究者は、「言説」を扱うことに十分に反省的であるべきだと付け加えた。

このように、本セッションで報告者らは、日韓W杯を報道するメディア言説の分析結果を報告するだけでなく、言説分析を共通の手がかりに「文化を語ること」、「他者認識」、「語りのポリティクス」へと議論を展開した。しかし、われわれにはメディア言説において決して代表されない人々の語りや生き様を彼ら／彼女らの生活にできるだけ近づいた立場から地道に文字化していく作業も求められている。それは一方で、「日韓W杯」が多くの人々にとってあまりに自明のものとして共有される過程において、もう一方で、メディアによって言説化されない人々の語りや彼ら／彼女らの生をとりまく構造的制約や社会的文化的格差を巧妙に隠蔽する装置として「日韓W杯」が動因され、奪用されていると感じずにはいられないからである。われわれは、メディアによって言説化されない語りを文字化し語ることそれ自体のポリティクスにおいても同様に反省的であるべきである。

学会の研究プロジェクト「W杯とメディア」の中間報告である本セッションは、スポーツをテーマとした社会学的な研究と、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル論、人類学における「他者」認識など隣接の学問領域との議論を接合させていく必要性と未開拓な領域へ多角的にアプローチする可能性を強く感じさせるものであった。

---

小笠原は、現在、日本の文化や教育の場に出出している陰鬱な徴候が、植民地との協働関係により作り上げられた特権が完全に失われつつある現状をなかなか認められないでいるかつての帝国主義国家における「ポスト・コロニアルな憂鬱」以外のなにものでもないと述べている（『思想』2002.1. P.115.）。

## ■テーマセッション2

### 「身体と学校」

松田 恵示 (岡山大学)

3人の報告者の内容について、まず簡単に振り返ってみます。トップバッターは、筑波大学の黄順姫先生。黄さんは、「身体・学校・記憶の産出」というテーマで、「反省的身体空間」という概念をキーワードに「学校的身体」が卒業後も現在の記憶再生の中で作り直されながら持続していくメカニズムを、ある学校の同窓会のフィールドワークから報告されました。「学校的身体」の象徴的空間として、同窓会はまさに「反省的身体空間」。こうした空間における過去の再構築作業を通じて、過去の身体は現在の身体に、そして未来の身体に繋がるということ、そして、特に同窓会は、学校的記憶の共同体、記憶再生の共同体として、過去の身体の再構築の内容、様式の正統化に重要な役割を果たすことになると強調されました。「学らん」姿で運動会を再現するおじさんたちのビデオ映像が、強烈に印象に残るご報告でした。

次の報告者は、香川大学の野崎先生。野崎さんは、「多元的祝祭としての運動会」というテーマで、二つの運動会のビデオ映像から、それを、「真面目な身体性の錬成(盲学校)」「真面目から逃走する身体性の馴致(某中学校)」と対比させてご報告。いずれの事例からも、運動会という非日常の祝祭に参加することで、日常における人々の関わり方が変わる、決して変わるはずがないと思われていた、自己自身と他者達との関係が変わる、という側面を強調されました。〈俗〉の意図的配備として構成された〈遊〉が、逆に〈俗〉の根底的な世界地平を組み替えてしまうという出来事と捉え、運動会という場が、何らかの作用で〈遊〉から〈聖〉へ飛躍しているのではないかと解釈されます。また現代の運動会に主流の形式から、隠蔽された政治性を問うこともなさいました。モダンのエトスを「普遍的理性の追求」、ポストモダンのエトスを「理性の網から漏れる身体性の復権」と捉え、〈癒しの場=政治の場〉ともなる現代の運動会の時代情動的な意味を問い直す、というご主旨でした。

最後の報告者が、この報告を書いている松田です。「生身の身体神話とスーパーフラットなスポーツ」というテーマで、近代的な主体概念を「生身の身体神話」なる身体意識と並列させ、テクノロジーの進展から「人工の身体」と「機械の身体」が融合し「ハイブリッド化」する人間、そして主体の変容という「ポスト近代」的状况に直面する学校の「反応」とその後の「可能性」について議論しようとしてしました。特に、例えば教育現場に見られる「体ほぐし」をめぐる言説からも見て取れるように、現在の日本の学校における身体教育の傾向は、一種のスノビズムではないかと強調。しかしながら、報告時間を勘違いしていたために軸心の「スーパーフラットなスポーツ」について言及できず、おおいに舌足らずな報告になってしまいました。

フロアーからもいくつかの質問や意見をいただき議論がなされました。学校と身体をめぐっては、フーコー流の議論の「外側」が求められているのが現実のように思えます。この意味で、もちろん不十分ではあるものの、一つの試みとして意義のあるセッションではなかったかと思っています。

## ■テーマセッション2

### 「身体と学校」に参加して

小野瀬剛志 (東北大学大学院)

テーマセッション2は、学会の研究プロジェクト「スポーツする身体」に向けて、「身体と学校の今」をテーマに行われた。黄先生は、学校の同窓会における記憶再生の過程を事例にあげながら、記憶の再生、再構成のメカニズムについて議論された。必ずしも平易ではない論理が、身近な例を挙げることで、わかりやすく解説されていた。また、M. アルヴァックスの集合的記憶論の批判が端的にまとめられていた点も、論理を追う上で役立った。野崎先生は、吉見俊哉氏の「運動会論」をベースにしながら、現在の運動会における「身体」について述べられた。太古から〈癒しの場〉であり、〈政治の場〉でもあったマツリの機能が、今日における運動会においてはいかに発現しているかが問われていた。松田先生は、ポストモダンとハイテクノロジー時代における「拡張する身体」について述べられた。ハイテクの進化にともなって、バーチャルな空間の中にますます身体が拡張されていき、その先に新たなスポーツが誕生することを示唆された。学校との関連性については、時間のためにきちんと議論し切れなかった感が残るのは残念である。

総じて、この原稿のためにいつもより議論に集中した(せざるをえなかった)という個人的事情も手伝って、「身体論」についてより身近に感じる事ができた。しかし、フロアからも概念についての質問がいくつかなされたが、個々の概念についてはうまく消化できないものも多かった。また、それといくらか関連することだが、各論者に共通する地平、言い換えれば共同研究していく上で議論が噛み合う地点が見えにくかった。もちろん、それらは、研究プロジェクトが進むにつれて上手くコラボレーションが成立していけば、自ずと解決されていく問題であろう。このセッションが今後のプロジェクトの成功に寄与することを願うと同時に、私自身もう少し「身体論」についての造詣を深めていく必要性を感じた。

## 座長：菊 幸一（奈良女子大学）

スポーツの政策過程と公共性

田島 良輝（早稲田大学大学院）

地域スポーツ組織の公共性に関する一考察

－岸和田市山直スポーツクラブの事例研究－

水上 博司（三重大学）

本セッションの共通テーマは、「公共性」からみたスポーツ政策過程やスポーツ組織のあり方をどのように考えるのか、におかれている。しかし、両発表ともその具体的対象は、田島氏が所沢市西地区総合型クラブを、水上氏が岸和田市山直（やまだい）スポーツクラブをそれぞれ事例としていることから、現在わが国のスポーツ施策（「スポーツ振興基本計画」を代表とする）の中心テーマとして展開されている総合型地域スポーツクラブと「公共性」との関係、及びそこでの諸問題について具体的に論議しようとしたものであると言えよう。

したがって、この論議の出発点は、当然のことながら「公共性」とは何かに置かれることになるのだが、田島氏はハンア・アーレントをベースにしてスポーツがクリエイティブする「公共性」についてメルリッチを手掛かりに展開し、水上氏はこれまで主に体育・スポーツ社会学で蓄積されてきた「権利としてのスポーツ」や「上からの」あるいは「下からの」スポーツ振興といった用語によって「クラブ権の公共性」を規定しようとするところから始める。いずれも、いわばスポーツ現象の外側に規定された政治学の「固い」用語によって理論武装し、総合型地域スポーツクラブの性格をスポーツ「からの」公共性構築の可能性として議論しようとしているのである。だから、田島氏の事例では、クラブ参加者の意識がスポーツへの関心ではなく健康への関心に置かれ過ぎており、スポーツ世界への「共通の関心」があまりみられないことから、アーレントの言う「公共性」は欠如していると評価する。これに対して、近年のスポーツファンの行動には、メルリッチの言う「集合的アイデンティティ」形成の萌芽がみられるから、スポーツがクリエイティブする「公共性」に開かれる可能性があると考えるのである。また、水上氏の事例では、地元中学校サッカー部の熱心な指導者であった教諭の突然の異動を契機として、地元関係者（指導者＋保護者）が委員会を発足させ、継続的な指導体制とナイター設備や事務局体制の整備・充実を図っていく過程でどの程度「クラブの権利性」が意識され、またそのような権利性を主張する余地があったのかが評価されている。例えば、顧問教諭の人事制度における関係者への配慮、学校施設の管理運営における責任主体、種目組織の編成と事務局設置、等々にまつわる諸問題において「クラブの権利性」＝新たな地域スポーツ組織の「公共性」を主張し、展開していく余地があり、そのような具体的な観点から問題点の掘り起こしを提唱する。

さて、このような両者の発表のコンテキストに対して、フロアーからは大きく2通りの

問題意識から質問が出されていたように思う。1つは、「公共性とはかくあるべし」という「べき論」とスポーツ現象との距離（ズレ）をどのように評価すべきか、から認識を出発させて、むしろ両発表とも前者に偏った評価をし過ぎているのではないか、という観点である。もう1つは、これとは逆に少なくとも総合型をはじめとするスポーツ施策には税金が投与されている以上、さらに一般的な公共性概念に沿うようなスポーツのあり方を模索していく必要があるのではないか、という観点である。この2つの観点から両発表を評価すれば、大きく両極に振れることになるであろう。しかし、このようなブレが、少なくともスポーツと公共性の諸問題を議論していく場合に常に付きまとわざるをえないことが自覚されたことは、本セッションにおける1つの収穫であった。すなわち、問題の出発点は、従来の「公共性」概念の出自や性格等々の妥当性に対する検討からこそ始められなければならないということである。

最後に付言すれば、これまでの「公共性」論は、20世紀型の、いわば政治的イデオロギー論の呪縛から未だに逃れられないように思う。その意味では、もっともそこから遠い距離にあったスポーツ現象が半ば「無理やり」に公共性論と結び付けられてきたのはなぜか、という素朴な問題意識から出発して、21世紀型の「公共性」論をもっとも「私的」活動を原点とするスポーツから再構築していく意義と可能性を模索することは意味のあることのように思われる。言わば「たかが」から「されど」への評価主体（視点）の創発的な逆転の必要性と、その深化のプロセスへの注目である。今回の両者の発表では、少なくとも従来の固い「公共性」概念からはマイナスに評価されている参加者の実態や動向にこそ、むしろスポーツ現象からの新たな「公共性」構築の可能性を見出すことができるようにも思われるのだが、いかがであろうか。

## 座長：山本 教人（九州大学）

このセッションでは、山口泰雄会員（神戸大学）と石澤伸弘会員（神戸大学）から、それぞれ「スポーツ環境指標による地方自治体のスポーツ環境の分析」、「ウォーキングイベントに対する参加者の期待とプログラムライフサイクルに関する研究」？加古川・瀬戸内倉敷ツーデーマーチ参加者の比較分析」と題する報告があった。

まず山口さんは、スポーツ環境を「ハードウェア部門」、「ソフトウェア部門」、「ヒューマンウェア部門」の3部門から包括的に捉えた上で、それぞれの指標項目を作成して、全国の市、及び教育委員会に質問紙調査を実施し、地方自治体のスポーツ環境のランクづけを行った。これに対して、研究目的や方法論、地方自治体独自の取り組みをどのように評価するのか、市や教育委員会への調査で地方のスポーツ環境の全体像が把握できるのか、などをめぐって質疑と応答が繰り広げられた。

福岡市のスポーツ行政は最先端を走っているもんだといつの間にか信じ込んでいた私は、



どの部門のランキング表の上位にも「福岡市」の名前を見つけれず、ちょっと意外な気がした。「住民が居住する地域のスポーツ環境に対して、当の住民は判断材料をもっていない」という山口さんの言葉が、大変説得力をもって聞こえた。

続いて石澤さんは、加古川ツーデーマーチと瀬戸内倉敷ツーデーマーチ参加者を対象に、イベントに対する期待の比較分析を行った。また、両プログラムのライフサイクル分析もあわせて行った。この報告に対しては、イベントが参加人口を増大していく過程において、プログラム提供者にどのような努力があったのかということや、現在大会参加人口が衰退している原因としてどのようなものが考えられるか、などをめぐって質疑、応答が繰り返された。

私は、九州各地で行われている市民マラソン大会に出場するのをひとつの楽しみとしているが、何度でも出てみたいという大会と、そうではない大会というのは、やはりある。このような経験をもとにこの報告を拝聴して感じたことは、それぞれのイベント参加者が、どのような期待をイベントに対して抱いているのかが、それぞれのイベントの特徴や独自性ととも分析されたならより興味深いものになったのではないだろうかということである。また、プログラムライフスタイルについても、イベントが成長し成熟期を迎え、やがて衰退してきた背景についての、よりきめ細かな分析が必用ではないかと感じた。

最後になるが、PCプロジェクターのトラブルで両会員、並びに関係の方々に変なご迷惑をおかけすることになった。また、山口会員の共同研究者である「土肥隆」会員のお名前を、大会プログラムで「土井隆」と誤記するミスがあった。大会関係者として、この場をお借りしてお詫び申し上げたい。

### 座長：三本松正敏（福岡教育大学）

「スポーツ社会学」の授業のための相互支援ネットワークの構築

—アジア・太平洋地域を中心に—

平井 肇（滋賀大学）

平井氏の発表は、スポーツのグローバル化に伴い「これまで一つの国や地域で完結していた現象や問題を、より大きな枠組みの中で捉え、分析・検討する必要性を増大させた」ことによって、「スポーツ社会学や文化論などの授業も、このような文脈の中で」考えられなければならないという問題意識から成り立っている。

そこで、アジア・太平洋地域を中心に、「スポーツのグローバル化をテーマとした授業を進める上で、この地域のスポーツ社会学者とどのような協力体制を組んで、どのような形態で授業を進めてゆくことができるか、具体的な取り組みと将来の可能性について」

氏の経験から「相互支援ネットワークの試み」として報告された。

具体的には、滋賀大学教育学部と学術交流協定を結んでいるオーストラリア、ディーキン大学との遠隔教育・フレキシブルラーニングに関する共同研究を基礎として、それぞれの授業の相互支援ネットワーク構築の試みとその実現に向けた取り組み、その教育的効果、問題点等について実体験を基に多方面にわたって提案された。

国際化、情報化、グローバル化が進展しつつある今日、当然視野に入れなければならない課題であり、今後の充実・発展が大いに望まれるが、グローバル化に伴うローカリズムの問題も是非、視野に収めていただきたい。

### 総合的な学習における河川環境教育と「川に学ぶ」社会の形成

—その1 指導者養成をめぐって—

小谷 寛二（呉大学）

小谷氏はグリーンスポーツについて、ここ数年来精力的に研究、実地踏査を行ってこられている。本発表もその一環であり、豊富な資料を基に、特に指導者養成をめぐる問題について発表された。

氏は、グリーンスポーツをわが国のスポーツ状況から、次のように位置づけている。つまり、The first stage=Competition sports, The second stage=Sports for all, The third stage=Green sportsである。この分類が妥当であるか否かは別として、The third stageは、「前2者とは違ったオルタナティブなスポーツであって、第三極のスポーツとして」の固有の特徴を有し、「このようなスポーツが公有水面である河川に最近見ることができるとする。そして、平成14年度から実施される「総合的な学習の時間」において求められる「生きる力」に対して期待される部分が、自然環境における体験活動から得られる可能性を持つものとして、グリーンスポーツの展開への期待を寄せている。

そこで、「川に学ぶ」社会の形成に関する実践が数多く報告され、2000年に設立された「川に学ぶ」体験活動協議会の紹介と、そこにおける指導者養成・認定制度についても触れられた。

膨大な資料に基づく発表であったが、これについての理論構築が望まれる。

オリンピック教育のためのスポーツ映像の活用  
文化論的な問題群の焦点化に向けて

舛本 直文（東京都立大学）

舛本氏は、スポーツ映像に関して多方面から分析、研究され、著作も多い。本発表もその一環であり、オリンピック教育の教材開発としてのスポーツ映像の応用を中心に、氏の編集によるビデオ映像を紹介しながら発表された。

本研究の目的がそのまま発表の全体を表しているもので、それについて見ておきたい。

まず、(1)IOCを中心とした「オリンピック教育」の取り組みの様子を概観し、その内容を確認する。(2)わが国における今後の「オリンピック教育のためのスポーツ映像の活用について、特に、その文化論的な問題群を焦点化して教育する可能性、および映像活用上の注意点について検討する。」

オリンピック教育のためのオリンピック関連映像として、今の所、IOCの公式記録映画、オリンピックのドキュメンタリー映像、オリンピック関連のドラマ映画、テレビの特集（NHK、BBCなどの放映資料）等、8つの映像ジャンルが挙げられ、オリンピックの歴史教育としてだけでなく、倫理や暴力、差別や文化編成の問題等、オリンピックが抱える様々な文化論的問題群を子ども達に考えさせる契機になるとしている。

しかしながら、氏の言うようにメディア・リテラシーの問題は常に視野に収めておかなければならないであろう。

座長：藤井 雅人（福岡大学）

小野寺直樹氏（横浜国立大学大学院）は、日本サッカー協会、日本中学校体育連盟および全国高校体育連盟による各学校の枠を外した合同出場措置の意味を、それがスポーツ空間において「私」を拠点とした公共性を構築していく際の起点となりうるのかという視点から考察した。

小野寺氏は、スポーツを「相対的に自立した場」である教育に組み込み、その手段化を進めてきた我が国の状況を批判し、合同出場を可能にした学校間の境界の撤廃にそうした手段化から脱した「私」を基盤とする公共性の構築の可能性をみている。スポーツの「面白さ」に影響を及ぼさない規制であるこの学校間の境界の撤廃が、スポーツの「面白さ」の保障につながり、それを追求することでスポーツの開かれた空間、すなわち公共性が担保されるとした。

フロアより、中体連と高体連は公共性の構築を意識してこうした措置を行っているのではなく、その境界は取り払ったがやはり「学校」という大きな枠を残していることから、実は逆に公共性に対して学校でのスポーツという閉じられた同質な空間を守ることを意図

しているのではないかと、といった現実と研究者側が提示する理念とのズレを指摘する声も聞かれたが、小野寺氏にはそうした乖離を埋める今後の継続的な研究を期待したい。

中塚義実氏（筑波大学附属高等学校）は、地域ぐるみでユース年代のサッカー環境の改善に取り組んだ「DUOリーグ」の6年間の実践を報告した。そこでは、東京都文京区・豊島区の高校運動部とクラブユースによるこのDUOリーグの展開を通じた、「これまでの」スポーツ観を「これからの」ものに変える試みが紹介された。中塚氏は、DUOリーグの実践に基づいて、学校運動部という「チーム」から学校を拠点とした「クラブ」へのスポーツ活動基盤の移行が、スポーツの生活化を促し、スポーツを支える人材の育成にも貢献することを指摘した。そして、そうした方向性は、「補欠ゼロ」そして「引退なし」といったリーグの理念や、生徒審判の積極的育成・登用、女子マネージャーによる取材活動と情報発信といったリーグ運営に不可欠な人的資源の育成・活用の実践例によって、説得力を持って具体的に描かれた。

今後DUOリーグは、東京都のユースリーグ構想、さらには全国規模で導入予定であるユース年代の地域リーグ戦構想とも密接にリンクした形での展開に努力されるようであるが、草の根からの組織化とサッカー協会という上からの組織化とをどのように融合させていくのか。中塚氏の実践者としての視点に基づくさらなる研究成果の蓄積を期待したい。

座長：高橋 義雄（名古屋大学）

『サッカー・サポーター・グループの可能性－W杯開催地（新潟）の事例から』  
棚山 研（立命館大学）

小生が担当した発表は、サッカーのサポーターを対象としたフィールドワークの成果を発表するものだった。棚山氏は「サッカー不毛の地？」新潟で展開される市民レベルのボランティアスティックな組織である「Alliance2002」に注目し、その組織化の経緯、活動内容、そして中心となるヘッドクォーター（HQ）の担い手の社会的背景や彼らのパーソナリティについて言及した。また氏が重点をおいたのは、組織の安定的運営の可能性である。新潟市民とはいえ転勤族が中心となって形成された「Alliance2002」のHQが地元民主体となり、さらにはNPO法人を取得するなど組織の今後は興味深い。しかしいっぽうでこの組織が個人の主体形成にいかに関与するかは現状では未知数である。氏はメルッチを引用して「Alliance2002」の組織の現状を分析し、清水のサポーター研究で問題提起している「ポピュラー民主主義」を実践する主体となる可能性については結論を留保している。発表時間にくらべ情報量の多い発表であったためか、フロアでは消化しきれない様子も伺え少々残念であったが、今後のフィールドワークの成果が期待される発表であった。

## 『サポーターの感情社会学的研究

—コンサドーレ札幌サポーターの感情世界を中心に—

二宮 雅也（筑波大学大学院）

二宮氏の発表は、一昨年に翻訳出版されたA.R.ホックシールドの『The Managed Heart（管理される心）』を理論的基礎に、サポーター個々人が紡ぎだす感情を、組織的内省法による内省的記述をフィールドノートに挟む方法でなされている。これまでのサポーター研究では、小生もその一人であるが、サポーターに見られる一見統一的な行動をとらえ、それを前提に分析を進める傾向があった。氏の研究はこれらの先行研究を踏まえた上で、さらに一歩踏み込んで感情表出システムを抉る挑戦的なものである。氏の分析は、サポーター個々人の感情世界はバラバラに存在し、その個々の感情が「感情管理」の過程を得て統一感あるものとして現出していることをリアルに描き出している。また試合状況やスタンドの場所、仲間との相互行為などによって、感情規則は常に動的に変化し、新たに構築されていることを紹介している。今後、他のJリーグの事例やプロ野球やプロレスなどの事例を加え、観戦者の感情表出から見た人類にとってのスポーツ観戦について新たな知見が得られることを期待したい。また氏の発表ではパソコンを駆使して、氏が入ったフィールドの映像やその場の会話が再現され、非常に印象に残るものであった。21世紀の学会発表方法に一石を投じる工夫には感心させられた。

## 座長：大沼 義彦（北海道大学）

第1報告小野瀬剛志氏（東北大学大学院）『『日本的スポーツ観』研究における戦時下の体育界のスポーツ思想との関連性について』は、15年戦争前後のスポーツ・イデオロギーを検討したものである。報告では「スポーツ」の正統的解釈をめぐるなされた対抗的立場の系譜、及びそれらと戦後思想との構造的連関、接続関係（「転向」を含む）を焦点に、「日本的」スポーツ観の出自が問われた。質疑は「転向」の解釈を巡ってなされた。議論を深めるまでには至らなかったが、その遠因一つに抄録や発表資料で提示された方法をめぐる参考文献についての説得的説明が省かれてしまったことがあげられよう。この点は残念に思えた。個人的にはスポーツの正統的解釈をめぐる二項対立が図式的過ぎたように感じた。それらを構築する際に援用された歴史的事例への関心からすれば、ややシンプル過ぎたきらいがある。シャープな論点設定ただけに丁寧な説明が欲しかった。

第2報告は、白石義郎氏（久留米大学）「バンカラと応援団：旧制学校文化における対抗戦の機能」である。旧制学校文化とバンカラを軸に、野球対抗戦での応援団衝突事件などが報告された。とくに明治・大正期の第五高等学校における野球対抗戦の実態やその機能は注目されてよい。報告は、第五高等学校における学生文化を「籠城主義」と「蛮カラ

主義」と規定する。後者の蛮カラ主義と学生スポーツ文化の接合が各時代事にプロットされ、その背後にある第五高等学校における対抗意識の源泉が掘り下げられていった。さらにその学生スポーツ文化の再生産や蛮カラ主義の内面化に果たした応援団の役割といったものにも言及された。質疑ではアメリカやイギリスとの比較において析出されるもの等を巡ってなされた。応援団のあり方を規定するであろう学生文化、また寮生活との関連がもう一つの論点となりえたとも言える。もちろん報告者も「籠城自治主義」から「自治」が欠落して「籠城主義」となったことに触れており、かかる観点からのより多面的分析の可能性を示唆していた。限られた事例ではあったが豊富な視点と広がりをもった報告であったといえる。

第3報告、立木宏樹氏（九州保健福祉大学）「わが国のスポーツ文化とグローバリゼーション」は、第1、第2報告が「日本的」スポーツ文化を論じたのと対照的に、グローバルな視点から「わが国のスポーツ文化」を論じたものである。グローバルとローカルの関連性が主たる論点となるが、報告はやや一般的な内容に留まった感が否めない。アルジュ・アパデュライ等、いくつかの文献も引用されていたが、スポーツ文化における有効性や独自の観点についての議論が待たれるところである。フロアーからは、前の2つの報告と関連して、「日本的」なるものとグローバルなものとの緊張関係（「西欧礼賛論」「近代化論」等との質的差異）、より具体的には総合型地域スポーツクラブ等の評価を巡って意見が提出された。

3つの報告は、日本のスポーツ文化をどう捉えるかという点で重なっていた。第1、第2報告は、明示的ではないにせよ、背後仮説として今日のグローバリゼーションに対するスタンスをにじませていた。3者による討議時間を司会者として確保することができなかったのが心残りである。

## 座長：柏原 全孝（追手門大学）

長野五輪にむけたアイスホッケー代表チーム強化のために、カナダ、アメリカから日本に帰化し、五輪後も日本でプレーし続ける選手たちをインタビューした千葉直樹氏（中京大学大学院）の研究報告はこれまで日本ではあまり顧みられなかった研究領域を開拓した点でユニークであった。二重国籍を認めない日本の国籍制度ゆえにかつての国籍を捨てなければならなかった選手の問題は、通常の海外移籍の場合とはまったく異なる側面、すなわち、アイデンティティの問題を必然的に浮上させることになる。とくに、カナダ人らしさアメリカ人らしさと日本人としての今の自分との折り合いをめぐる問題は引退後も各選手やその家族の将来につきまとう問題であり、非常に重要な社会学的課題であろう。こうした問題を検討するにはインタビューの時間が選手4人まとめて1時間だけとごく限られたものであった点は残念であるが、今後のさらなる研究展開に期待させる報告であった。

大学運動部員を対象にした性意識の調査を報告した森康司氏（九州大学大学院）の研究は、女子マネージャーの存在に象徴されるような保守的な性意識と運動部との関係を計量的に探るもので、性別役割分業に運動部員がより肯定的な傾向を持つとの結果が示された。どういう背景によりそうした傾向が生まれたのかという因果的な問題は今後の森氏による調査分析を待ちたい。また、回収率について、男性より女性が20%近く高く競技特性についてもチームスポーツより個人スポーツの方が20%近く高くなっている原因や、男性の運動部における女子マネージャーと女性のみ運動部における女子マネージャーとの異同等々、さらなる研究の課題がフロアとの質疑から生まれるなど、活発な議論が行われた。

### 座長：渡辺 潤（東京経済大学）

発表者は高橋豪仁（奈良教育大学）、田中研之輔（筑波大学大学院）の2名。そのテーマは、高橋氏が「あるスケボー少年たちによる『スケボー・コート設置を求める会』と彼らのスポーツ享受スタイルについて」、田中氏は「都市空間の管理により増幅する『異質性』—スケートボーダーの囲い込みから」であった。

両者ともに、町中に集まってスケートボードに興じる少年たちをフィールドワークするという共通性を持っていた。スケボーはサーフィンから派生したもので、スキー場で一般的になったスノボとは兄弟だが、サーフィンやスノボとは違って、いまだにスポーツとして社会的に認知されたとは言い難い。それは行われるのが町中の公共の場、たとえば駅前広場や公園、あるいはストリートで、おもに夜間だということにある。自然発生的で、しかも公共の場を勝手にパフォーマンスの場に変えてしまう。当然、集まる少年たちは大人たちからは不良の集まりとしてみられがちである。

高橋氏の発表は奈良県生駒郡のケースを例にあげて、スケボーをスポーツとして認知してもらった運動を展開した少年たちの行動をレポートし、分析している。スポーツをしているという自覚があるわけではなく、ただ仲間と集まって楽しいひとときを騒いですごしたいだけという少年たちが、その時間と場所を確保するために、行政に働きかける。そこに、「スケボー欲求という私利私欲」から社会性や公共性への目覚めを見ようとするものである。

田中氏の発表は茨城県土浦市のケースを材料にしている。スケボーをやる少年たちが不良扱いされるのはここでも同じだが、土浦市の場合には、「専用広場設置」を求める活動の後に駅前広場という公認の場があたえられた。少年たちにとってはおおびらにスケボーができる場があたえられたわけだが、しかし、反面、冷たい目で見られ、追い出しを食った時ほどの充実感は得られなくなる。広場は少年たちが獲得した場だが、同時に大人たちによってストリートから追放され、特定の場に囲い込まれた結果でもあった。

このようなケーススタディについて、高橋氏はH. アレントの「公共性」の概念と、そ

れを批判的に検討した加藤典洋の議論を援用する。公共性にいたるプロセスの出発点に私利私欲を置くことの必要性をスケボー少年たちに見ようというのだが、その芽は一方で少年たちの社会的かかわりへの消極さによって、他方では、大人たちの安全な場への囲い込みという意図によって頓挫する。

田中氏は、一方ではシカゴ学派の流れを汲むC. S. フィッシャーのサブカルチャー論に依拠しながら、都市、あるいはストリートを、文化を生み出す装置としてとらえようとし、また他方では、カルチュラル・スタディーズのサブカルチャー論とその展開を見据えながら、抵抗としてのスケートボード、あるいはそれ以上に、都市に生きる若者の生を捉える視点にしようとする。

若者の行動を、スケボーを通して見つめようとする点で共通しているが、年齢のせいかな田中氏の報告の方がよりスケートボーダーに近いところにおいて、その実像を捉えているのではないかという印象をもった。

### 座長：梅津顕一郎（呉大学）

「包摂と逆説の力道山」

海老原 修（横浜国立大学）

「プロレスラー力道山」という存在の二重性を指摘し、日本社会全体が彼について「組み込む」部分と「排除する」部分とを使い分けることにより、戦後体制のイデオロギー装置として機能させてきた点を、批判的に検討した。時代背景から「力道山」というテキストが何であったかを仮説的に描き出し、戦後保守層の巻き返しの時代に於けるくがんばれば何とかなる>という物語の提供者となっている点を指摘した。

今回の報告は仮説提示を主眼としており、中間報告的な性格ではあったが、「力道山」のイデオロギー装置としての部分に徹底着目し、民族差別の問題から冷戦構造、さらには戦争責任にまで議論の可能性を広げた点において、意義は大きいといえる。今後、仮説を論証し、また、精緻化させていく作業が施されるであろう。

「プロレス批判の言説分析」

小林 正幸（法政大学）

故・井田真紀子氏の「プロレス少女伝説」1991に関する立花隆の批判を逆批判するという戦略によって、ファン＝「読み手」の能動性という観点からのプロレス文化論の構築を目指した。

「プロレス・テキストとそれを見るものの「想像力」の相互関係」という結論論自体は、既に業界人や親・プロレス派文化人らの口によって語られてきたことであり、また一部にはプロレスのマンネリ化、閉塞状況も指摘される中、現状のプロレス文化を説明する戦略として最適であるのか、若干疑問も残る。しかし、こうした議論を業界内あるいはプロレスシンパの領域から解き放ち、バルトの記号論、あるいはトンプソンのフレーム分析、さらにはメディア論に於ける「読み手」の議論等が交錯する地点に議論を定置させることで、独自のプロレス文化論として展開しようとしたところに意義がある。なお、小林氏自身もネット上での「プロレス論客」のひとりであり、その意味でもユニークな報告であった。

#### 「スポーツノンフィクションの動向について」

藪田 硝哉 (実践女子短期大学)

上柿 和生 (スポーツデザイン研究所)

報告では、スポーツノンフィクションを「報道と文学の中間」として位置付け、永らくスポーツノンフィクションの世界に関してきた経験から、1990年以降この10余年の動向について概観した。特に近年の傾向として、分野的には野球、サッカー等に関する作品が多く、特にサッカーに関しては取材力の充実した作品が多いこと、新傾向としてスポーツそのものよりも、広い意味での日常の中のスポーツ性への着目が高まっている点などを指摘した。

日常の中のスポーツ性への着目は、スポーツ概念の再構築や、スポーツの場に関する模索といった今日的課題とシンクロし、その意味ではアカデミズム、ジャーナリズムの垣根を越え、広く「スポーツ」を記述し考える分野全体に共通するテーマである。

#### 座長：リー・トンプソン (大阪学院大学)

##### 「ボクシングの社会学」

池本 淳一 (大阪大学大学院)

ボクシングが成立した過程を、独自の枠組で整理した。ボクシング世界を構成する3つの要素としてのルールとマッチとジムが、社会背景の影響を受けながら変遷する過程を辿った。マッチとジムの、それぞれ「場」と「人」とでもいえる二つの下位カテゴリーに分類した。マッチの場合はそれが「開催地」と「観客」、ジムの場合は「練習場」と「メンバー」となる。この分類はボクシングの成立史を明確にするには役に立つだろう。この枠組みを使って、ボクシングの歴史を5つの時代区分に整理したが、詳細は省略する。最後

にボクシングと日本武道と中国武術との簡単な比較を行った。ボクシングのジムはパブから発展した故に、「社交の場」である。それに対して日本の武道は藩校や個人の邸宅から発展した故に、教育の場である。ボクシングのマッチはパブの出し物だからショー、武道のマッチは学習の成果を試す「試験」である。多少強引かも知れないが面白い。フロアからは、イギリスだけをとりあげたことに対する疑問と、フランスなどのボクシングとの関係についての質問などがあった。学会でのデビュー戦として無事にこなしたといえよう。これから、ジムで行っているフィールドワークに基づいた、さらに独自の研究を期待したい。

#### 「黒人ボクサーの表象と身体政治」

山本 敦久 (筑波大学大学院)

映画やノンフィクションで最近(あるいは相変わらず)注目を集めているモハメド・アリをとりあげた。96年のアトランタ五輪開会式で聖火台にアリが火を灯したのは、発表者にとって「屈辱の日」であった。64年リストンを破って王座についたアリのボクシング・スタイルは革命的であったという。発表者はビデオをみせ、あるいはモーションを加えながら解説した。そのスタイルは、60年代のブラック・パワーの中から出てきながら、その中心にもあった、という。つまり、アリの「過剰な身体と喋り」はメインストリームの白人社会に組み込まれ飼いならされることを拒むブラック・パワー(政治)、ストリート(社会)、Funk(芸術、表象)、と密接な関係にあった。そしてアリはアメリカだけの現象に留まらなかった。先進国で圧倒的な権力を持つキリスト教に背を向けイスラムに改宗し、徴兵を拒んでタイトルが剥奪され、アフリカのキンシャサでそれを奪い返したアリは、全世界の人々に愛された。そのアリが、商業主義に走ったIOCの主要なスポンサーであるコカ・コーラの本拠地アトランタで開かれたオリンピックに駆り出され、やはり商業の商品になってしまった。

フロアからは、①60年代の抵抗が取り囲まれた経緯をもっと具体的にとらえるべきだ；②白人を主流とする学生運動がアリに感動したのはなぜか；③ビデオで見たアリの動きは他の解釈ができるのではないか、などの質問や意見があった。

最後に、二つの発表を司会した感想を一言。大会の発表論文抄録集に載せる抄録は、なるべく当日の発表内容を誠実にまとめたものであるべき。

座長：西村 秀樹（九州大学）

「力くらべの合理化」

飯山 義昭（東海大学）

この研究においては、「石占」という呪術的な儀礼から、「力石」という労働力をはかたり鍛えたりする通過儀礼へ、そしてスポーツとしてのバーベル競技へ、という変遷の過程を「力くらべの合理化」としてとらえている。

フロアからの質問を参照すると、「石占」における重軽石は誰でも持ち上げられる軽いものであるため、「石占」は力くらべの前身とは言いがたいのではないかと、「石占」から「力石」への移行を力くらべの変遷としてとらえるためには、重軽石には重いものもあったという根拠を明確に提示する必要があるといったこと、ウエイトリフティングやパワーリフティングは外国で生まれたものであるから、外国の力くらべの前身を歴史的に見ていく必要があるといったことが課題としてあげられる。

題材として興味深いものであり、資料に丹念にあたりながらの継続的な研究を是非期待したい。

「障害者スポーツにおけるカテゴリー化に関する研究

—車椅子バスケットボールにおける実践を通して—

後藤 貴浩（群馬大学）

障害者と健常者がともに障害者スポーツ（車椅子バスケットボール）を実践するなかで、「障害者スポーツ」のカテゴリー化がどのように形成されていくか、が検討されている。

健常者が参加し始めた頃には、準備運動のしかた、車椅子の操作練習、ドリブルのしかたなどにおいて「障害者のためのスポーツ」というカテゴリーが前提として存在している。ところが、健常者が障害者のなかにはいつとも練習を重ねていくうちに、車椅子バスケットボールの「やり方」を身につけていき、障害者と同じ地平に立つようになる。「障害者スポーツ」のカテゴリーが一旦消滅する。

しかし、車椅子バスケットボールの専門化・高度化が進んでいくと、再び身体的差異が顕在化し、障害者スポーツというカテゴリーが再現化してくる。すなわち、同じ「やり方」に従ってプレーしていても、どうしても身体的差異からプレーの質やレベルに差が生じたり、健常者のプレーに思わぬ反則が生じたりする。

こうしたことは、障害者スポーツという枠組み（カテゴリー）のなかにあらわれてくる根本的問題を明らかにする。すなわち、障害者スポーツは競技としておこなわれる場合、あくまでも身体的・技術的な優劣を競うことが目的とされるが、その優劣の差異は、後藤

氏がインタビューしたKI氏の言葉にもあらわされているように、「障害の状態によって、能力よりも障害の状態によって決まる」ということである。そこに、障害の状態による障害者スポーツのカテゴリー化の困難さが露呈されているのである。

「Citius, Altius, Fortiusの意味するもの」

早川 武彦（一橋大学）

近代オリンピックの提唱者クーベルタンの思想構造が、当時の時代・社会の状況のなかからどのようにして形成されていったかを明らかにするなかで、とりわけ、Citius, Altius, Fortius（より速く、より高く、より強く）の標語が何を意味するかについて、綿密な検討をおこなっている。19世紀末から20世紀初めのフランスにおいてスポーツが大衆化され（例えば、ツール・ド・フランスの開始、労働者スポーツクラブ、国際労働者スポーツ連盟の結成、社会主義スポーツアスレティック連盟の結成など）、またヨーロッパで古代オリンピック研究・運動の動きが高まるなかで、クーベルタンはヘレニズムに回帰しながら「スポーツは進歩への欲望と危険を冒してまで集中して行う意志的習慣的崇拜行為である」というスポーツ教育学を提唱する。それまでの教育学の主知主義的偏重を打破し、身体的な力を精神的倫理的な力に転化していく新たな教育思想を展開していくのである。「より速く、より高く、より強く」は、近代社会の合理主義 科学の進歩に依拠した、数量と記録に価値を見出す競争原理を反映した単なる「記録への挑戦」ととどまるものではなく、古代に回帰した成年男子の人格形成（人格は精神によってではなく、何よりも先ず、肉体によって作り上げられている）を目指したものであった。

早川氏は、オリンピックは「単に雌雄を決することや記録更新といった結果主義に終始するものではなく、遊戯、儀式、祝祭、壮観というパフォーマンスの諸ジャンルの、分化・精密化・多層化が同時に進行する過程」であり続けると述べるが、そのことに対して、こうしたクーベルタンの青少年の人格形成という教育思想がどのように反映していったのだろうか。こういった視点からの詳しい説明を聞いてみたかった。

## 座長：白石 義郎（久留米大学）

「途上国開発とスポーツ—開発協力フレームの構築に向けて—」

岡田千あき（大阪外国語大学）

「途上国における社会開発ツールとしてのスポーツの可能性」

小林 勉（信州大学）

二つの発表ともに、途上国におけるスポーツの社会的役割の可能性を探ろうとする発表であった。

「途上国開発とスポーツ」においては、インフラ整備から人間開発へと発展した開発概念の進展が語られ、自助努力を中核とした人間開発概念を分析フレームとすることの意味が考察された。キーワードはハードからソフトへの移行、ニーズに基づいた援助である。スポーツはソフトに分類され、精神を豊かにするものとして開発概念に組み込まれているという。また、開発援助においては、伝統的な身体文化への尊重が求められ、スポーツが与える「楽しみ」が非日常的な空間として精神の解放に作用するとされる。しかし、同時にそのことが、分析フレームとしての課題を提起する。すなわち、精神への作用ならば、結果をどう評価するかという評価基準の問題である。現在、この評価をめぐる議論がおこなわれているという。

では、このような分析フレームは具体的などのような実践例に適用可能なのか。この実践事例の発表が、「途上国における社会開発ツールとしてのスポーツの可能性」であった。南太平洋にあるヴォヌアツ共和国において、女子クリケットが社会的紐帯の契機となったことが発表された。クリケットは伝統社会においては、社会参加への道筋がなかった女性に他者と触れ合う機会をもたらし、自発的な社会参加への道を開いた。しかもそれは開発援助者が意図したものではなく、結果的に女子クリケットが受け入れられ、女性同士の社会的連帯の絆となったという。質問もそれを可能にした社会条件に集中した。どのような社会条件がクリケットの受容を可能としたのか、クリケットとおした女性同士の社会連帯はいかにして可能だったのか。質問者にはヴォヌアツ共和国の社会構造がよくわからないことから、議論は充分噛み合わなかったが、議論を通してスポーツ社会学研究の広がりを感じさせた。

スポーツの概念そのものが、近代ヨーロッパを始源としており、研究対象も近代国家を対象しがちであった。しかし、この二つの発表は途上国においてスポーツは近代国家とは異なった機能をはたす可能性を示唆した。第二に、問題解決的アプローチの可能性を感じさせた。途上国研究は問題解決をめざしており、スポーツを問題解決のための道具とみる見方を提示した。この視点は今後のスポーツ社会学研究の発展におおいに参考になる視点であった。

## 座長：谷口 勇一（大分大学）

「スポーツ・タウン」から「スポーツ・クラブ」へ ～成岩の実態を読む

中島 信博（東北大学）

成岩スポーツ・クラブが注目される要因は、学校（教員）が中心的役割を担い、地域社会とともにクラブづくりを推進していることだと言われている。つまり、部活動をスポーツ・クラブに発展させえた（させようとしている）キーパーソンが学校の中に存在したことこそ重要な意味が存在しているのである。

このキーパーソンとなった教師らに対する面接から得られた知見は大変興味深いものであった。すなわち、教師は学校を動かし、学校は地域社会を巻き込み「スポーツ・タウン」を「スポーツ・クラブ」へと進展させ、スポーツ・クラブは行政を動かし、さらには地域スポーツを取り巻く制度改革まで引き起こしていくという、一種のソーシャルムーブメントがそこには発生してきたという。

フロアからの活発な質疑もあり、座長からのコメントは差し控えたが、小生、以前政令市の体育協会に勤務していた際、クラブづくりを主導する立場として最も苦慮したことは学校の理解を取り付けることであった。中島氏のケーススタディが「学校からのクラブづくり」という方法論へと発展していく可能性はないのだろうかという期待感を抱いた次第である。

コミュニティ・メディアとしてのスポーツクラブ

～バイロンベイ・サーフライフセイビングクラブを事例として

矢崎 弥（山形県立米沢女子短期大学）

矢崎氏は、在外研究時にかかわってきたオーストラリアのバイロンベイ・サーフライフセイビングクラブを研究対象として取り上げ、その機能性を「コミュニティ・メディア」という視点から考察していた。

日本ではややなじみの薄いサーフライフセイビングという活動であるが、「ビーチ」を重要な収入源としている当地においては、住民の関心度も必然的に高いという。クラブは、サーフライフセイビングをとおして主に、①ビーチパトロールと救助、②競技の普及、③住民に対する海浜行動の指導、といった役割を有しており、そのことによって、メンバー及び住民達はビーチでの「従順な身体」が形成されてきたとの考察がなされていた。

本研究における固有性と普遍性をどのあたりで整理していけるのか、すなわち日本におけるクラブ展開に援用していける可能性はあるのか、といった疑問はフロアからも出たところ。さらにクラブの機能性について言及していく際、果たしてNPO化が適切な選択肢

なのかという意見も。今後の研究継続を期待したい。

イングランドにおけるフットボールのクラブとコミュニティの関係  
～1990年代における商業化の再検討を通じて～

五香 純典（筑波大学大学院）

五香氏の発表は、サッカーの母国であるイングランドにおけるクラブとコミュニティの関係性について検討するものであり、詳細な歴史社会的考察がなされていた。本研究は、クラブ文化の後進国といわざるをえないわが国のスポーツシーンにも少なからず示唆を与えるものであり、大変に興味深いものであったと思われる。

氏の研究は、クラブの「商業化に対する批判的論説」を批判的に検討することに焦点化されていた。すなわち、商業化を拒み、ある種のアマチュアリズムを踏襲しようとしてきたクラブを取り巻く社会規範（批判的論説）がいかなる変容を遂げてきたのかについて言及し、今日のクラブにおけるビジネス-コミュニティの緊張関係を積極的に正当化するものであった。

レジュメ最後の「意義と将来性」で、『日本サッカークラブに関しても発展的な議論を導く可能性あり』との記述があった。クラブ経営（存続）において暗中模索が続くわが国Jリーグへの理論援用を切に期待する次第である。

座長：小椋 博（香川大学）

現代社会における賭けに関する考察—競馬予想の課程から—

麻生 征宏（筑波大学大学院）

フロー理論とフロー体験の検討

迫 俊道（広島市立大学大学院）

N133会場で行われた上記二演題の発表を要約すると、当会場でのディスカッションの最中にフロアから指摘があった「環境と主体を読み解く技術：情報」の検討だったといえるだろう。

迫氏はフロー理論の提唱者、チクセントミハイも指摘するフロー体験のネガティブな側面、即ち楽しい活動中に経験される没入感、ある種の中毒症状の検討が必要だという。人はフローの体験中、そのことを意識的に統御できなくなったり、そのことに溺れて他の事を顧みることが出来なくなる危険がある。従ってフローが絶対的な意味で「良い」とは言いきれない。だからフロー体験は社会の中で慎重に議論されなければならない。言い換え

れば環境と主体を読み解く技術の検討が必要だということである。

このことは麻生が問題とした競馬という賭けの場面では、主体が、「でたらめ」や「運」としての環境を読み解く「技術」としての予想という行為があり、そこに「情報」が介入する。ただしこの技術に関して、迫は肯定的に評価し、麻生は否定的、あるいは少なくとも一種の「必要悪」といったニュアンスで同じ問題を論じた。

迫は一つの可能性として、ギブソンの「アフォーダンス」理論を取り上げる。アフォーダンスは刺激ではなくて「情報である」。人間はこの情報を環境に「探索」する。そして迫は中井正一が水泳のフロー体験の中で描写した「技術」は、このアフォーダンスに他ならないという。環境が行為者にアフォード（誘発）するもの、また実在から命じられてくるもの、これを行為者が探索する過程が浮かび上がる。そして迫は行為者と環境との理想的な関係の到来を「待つ」行為が、フローには必要だという。日本の芸道に関して言われる「待降的構造」（今道友信）や禅的思想の検討の必要性を発表者は提案した。

賭け（競馬）がフローのネガティブな側面を修正し、「安全な」ゲームとして姿を変えるために、即ち全てを運に任せるという完全な「社会悪」から脱するために、情報を収集・編集し、確率やリスクを計算する。その結果、「予想する」という小心者の「小さなゲーム」が誕生し、賭けを楽しむ人も増えたと麻生は主張する。「確率化する賭け」は、「情報化社会」、市場の「カジノ化」そしてデリバティブ等に見られる「確率化する社会」にどこかで通じているのだろう。

座長：小谷 寛二（呉大学）

『踊る』観念の多義性に関する研究

—『身体の脱秩序化と再秩序化』を視点として—

畝木真由美（岡山大学大学院）

「ダンス」=舞踊の「踊る・躍る」という概念は非常に多義的であることをまず指摘する。その研究の方法論を尼ヶ崎彬による、言葉と身体の社会的基盤を手がかりに、「らしさ」のイメージや身体的な経験が、言葉の概念を取得する際「らしさの型」として蓄積されることを可能とし、この「型」を日常生活の中で意識的・身体的に「なぞる」ことによって言葉の認識が高まるといふ。日本文化の脱秩序化に対する美意識の妥当性の説明があった。尼ヶ崎の紹介に対する畝木氏自身のオリジナル性の指摘、あるいは「踊る」に対する「躍る」がより問われることで尼ヶ崎を超えることになろうという指摘などがあった。



「近代日本における都市と身体—明治・大正期の講演を手がかりに—」

小坂 美保（奈良女子大学大学院）

近代による象徴としての規律・訓練の場として運動場の設置がよくあげられるが、身体の可視化を理由に、「国民」としての統一性を意識して明治政府は、学校以外にも都市に造る必要性から公園が設置されたという。面白い歴史社会的な仮説・検証の発表であった。都市における公園の受容過程—近代的都市施設としての運動ができる装置として、また、公園と身体の規律・訓練—日本体育会による都市民の身体の規律・訓練化を奨励する運動機器・器具の設置などの紹介から、無意識に、むしろ主体的に市民がこれらを取り入れていった、と暫定的に結論付けている。実際には、欧州の自由性、ぶらぶら歩きも公園文化に入っており、両面から検討する必要があるとの指摘があった。都市論における身体文化研究者として期待したい。

「青少年スポーツ事業の評価システムの構築

—Precede・Proceedモデルの援用—」

桜井 学（順天堂大学大学院）

野川 春夫（順天堂大学）

青少年スポーツ事業における的確な策定や実施、あるいはそのプロセスや成果について、行政による説明責任がまっとうできるような評価システムを求めて、ヘルスプロモーションの展開モデルとして評価を得ているPRECEDE-PROCEEDモデルの妥当性を見たものである。結果、質問を受けたパネリストは当事業を評価するモデルとして妥当であると判断したという。実用的には修正が必要であるが、Plan-Do-Check-Actionの評価システム構築の結果が説明された。評価基準、政策合意、政策実行、導入段階に関すること、実際問題としてのクラブ育成事業の評価としては大きすぎること、評価と次年度への予算化との関係性の配慮、このモデルの妥当性・有効性の再検討などの質問があった。

次期開催校挨拶

岡山に こられえ！

岡山大会実行委員長：大橋 美勝（岡山大学）

日本スポーツ社会学会会員の皆様方、岡山大学の皆様です。大変ご無沙汰しておりましたので、顔と名前が一致する方はごく少数で、ご存じない方がほとんどになってしまっただろうと思います。

團先生が退官され、その後任として後を継いだのが松田先生で、彼の声かけで本学会開催の世話をさせて頂くことになりました。

開催年月日は2003年3月22日23日で、従来より1週間早くなります。

岡山は日本全国で一番晴天の日が多く、「晴れの国 岡山」と称されています。気候も県民性も温暖のため、国体を控えて志気をあげるために「燃えろ岡山」をキャッチフレーズにしたところ、山火事ばかりが増えたということもありました。

3月のこの学会が開かれる頃は、今年の様子ですと、きっと桜の花が楽しめることでしょう。

また、岡山市内の中心部には日本三景園の一つである「後樂園」や築城400年を迎えた烏城があって、学会の息抜きにはもってこいでしょう。勇壮な瀬戸大橋、倉敷美観地区、ちょっと足を伸ばすと、湯郷温泉や奥津温泉など有名な温泉がたくさんあって、心と体を癒すこともできます。

学会の中身はこれからですが、皆さまのご期待に添えるように準備しようと思っていますので、今のうちから手帳に書き込み、御予定下さい。

岡山に こられえ！ みんな待っとるでえ…………。

# 「日本学術会議」懇談会の報告

会長：平野 秀秋（法政大学）

福岡学会大会の数日前（3月20日）に、議題「日本学術会議の自己改革案について」という内容のもとに、日本学術会議第1部会員と関係学協会との懇談会があり、本学会にも出席要請がありました。理事長・事務局長などと協議の上、住居が地理的に近いからという理由で、私が急遽出席しました。「会報」編集担当理事から、この報告の掲載紙面の提供をいただきましたので、簡略にご報告します。

なお同懇談会后、日本学術会議としての中間報告「日本学術会議のあり方」が、すでに同会議サイトに掲載されています。ここに報告する論点は、ほとんどすべてこの中に網羅されています<<http://www.scj.go.jp/arikata/中間まとめ.pdf>>（以下「文書1」）。ぜひご一読願います。論点の整理もここでなされています。そこで以下の報告は、私見にわたることをお許しいただきつつ、むしろ歴史的背景などを加えて書かせていただきます。

大きく見ると、問題の核心は前世紀末から21世紀にかけて、学術研究とはなにかという問題に関わるでしょう。1) 学術研究とは知識追求の営みに尽きると考えるべきなのか、2) それとも科学は技術との提携によって何かを生み出す営み（投資が利益を生む営利活動のようなもの）と考えるべきなのかという問いです。この根本的問いは、前世紀「ラッセル・アインシュタイン宣言」などがあつたにもかかわらず、答えられぬまま今世紀に入りました。今日では、2)の選択肢がいつのまにか自明の真実のように扱われ、科学技術という不思議な用語までできています。話しが大きすぎたらお詫びしますが、これは社会学という学問自体ともきわめて関係が深いのであえて触れました。

急に話を具体的にします。今回の事の発端は「総合科学技術会議」の発足にあります。法案は小淵、森内閣時代から準備が進められていましたが、会議が具体化したのは現内閣になってからです。この会議の詳細は<<http://www.8.cao.go.jp/cstp/>>（以下「文書2」）に掲載されていますのでぜひご覧下さい。総理大臣を議長とし、内閣府に設置された「科学技術に関する総合戦略の立案」を任務とする会議ですが、議員14名中7名が財務・経済産業等の閣僚で、産官学提携によるハイテク指向が強いものです。問題の直接動機は、この中に日本学術会議会長が加わり、かつここに設置された7専門調査会のなかに「日本学術会議の在り方に関する専門調査会」が置かれたことです。

「文書1」の元リンクでお分かりのように、日本学術会議は第2次大戦直後の1948年に法制化された組織です。私事ですが「文化国家建設の一環」という希望的表現が、耳に残っています。しかし、人によってはこの頃に科学技術という20世紀アメリカンサイエンスの種が日本にも蒔かれたという理解もあり得るでしょう。ともあれ、この専門調査会での議論が目下どうなっているかも、「文書2」からリンクを辿ればある程度把握できます。かなり大まかな要約をすると、政策立案にコミットする米国型か、「科学のエクセレンス」

組織とするヨーロッパ型かという問題点が選択肢となっていることが理解できます。

とはいえ、「文書1」にも書かれている通り日本学術会議は全会員数210名程度で、諸外国アカデミーなどに比較して過小であるだけでなく、「科学者コミュニティ」としての活動（何を活動というべきかを別にして）という点からも、いままで重要性に比してはやや目立たない存在でした。目下、日本学術会議が「自己改革案」のなかで鋭意指向している目標は、一方で会員数を約10倍の2,500人程度に増強すること、他方ではわが国の「科学者コミュニティ」のあるべき姿は何かを早急に打ち出すことだと考えることができます。いわば、前者は量的充実、後者は質的充実です。まとまりつつある案は「文書1」に譲りますが、「総合科学技術会議」に議員を送る以上この両面での困難な課題をクリアすることは、たしかに必要最低の条件でしょう。

「文書1」によれば、現在わが国の「登録学術研究団体」は1,356団体とされています。この中には、本学会も含まれています。中間案によれば、これら登録学術団体からも直接に会員を選出することになる可能性が高いと考えられます。会員各位が、そのような見地からこの問題に関心を持っていただくよう強く願います。

巷間、明5月7日からの国会では経済構造改革関連だけでなく有事立法や人権擁護立法など、将来への影響が深刻と予想される議題が山積していると指摘されています。実は、「国立大学の独立法人化」やいわゆる「トップ30」計画なども、それらに勝るとも劣らない重要な影響を将来に残す問題点です。また、以上述べたすべてとの関連で、わが国の「科学者コミュニティ」の形成は、どのようなビジョンのもとに行われるべきなのでしょう。

過日の懇談会で、科学研究者の資格を認定し保証する組織として、学術団体がその任にあたるという選択肢も検討に値するという議論がありました。現行法上、教授、助教授等の資格認定は、採用時に各教授会慣例として行います。学術団体の資格認定がどう位置づけられるべきか、まだ明確ではありません。だが、仮に大学教授の任期制などがより具体化すると、この問題は避けて通れなくなる可能性もあります。私見では、わが国研究者の資格認定にあたる「科学者コミュニティ」の成熟度も必ずしも高くないとも思われます。すぐれた業績（「メリット・ベース」）が研究の場の保証に反映されるにあたって、学会の責任は重いと思われます。会員諸氏の全般的なご理解と助言を得たく存じます。

# 『スポーツ社会学研究』編集委員会より

編集委員長：伊藤 公雄（大阪大学）

『スポーツ社会学研究第10号』、すでにお手元に届いていることと存じます。

編集後期にも書かせていただきましたが、編集を引き受けるということがこんなにたいへんなものだとは思っていませんでした。

投稿予定の会員の皆様にお願ひがあります。現在、費用節減のため、割り付けまでのほとんどの編集をアルバイトの手作業で行っています。その作業の中で、従来の「執筆要項」では、対応しきれない次のような問題点が見えてきました。総会でも提案させていただきましたが、今後は、できるだけ、以下の要領に従って投稿していただきますよう、お願いいたします。

1. 論文本体、表紙、抄録に使用する活字のポイントやフォントの統一のための指定がでないか。

論文本体は和文は、MS明朝で9ポ、欧文はcenturyで9ポ/表紙のタイトルはMSゴシックで、14ポ/抄録（和文）はMS明朝で9ポ/abstract（欧文）はcenturyで9ポ原則として、Windows/Wordに統一してください。

2. 引用文献について

欧文の場合には、雑誌はイタリック、書籍の場合はアンダーラインを引いてください。

3. フロッピーについて

- ・最終段階でフロッピー提出を明記してください。
- ・フロッピーには、編集者が処理しやすいよう、「〇〇年度スポーツ社会学研究投稿」と記入してください。
- ・また、表紙、論文本体、和文抄録、欧文abstract、図表にはっきり区分してください。
- ・最終原稿送付時はフロッピーとともに、打ち出し原稿2部を同封してください（編集委員会に一部残すとともに、担当編集委員による最終チェックをおこなうため）・フロッピーは破損しないようケースに入れて送付してください。

4. 校正時の注意

校正時、訂正や追加、依頼事項は、本文中に朱ではっきり記入してください。

5. 図表の処理について

本文中に図表を入れる場合、基本的に投稿者が原稿に配置してください。

今後とも、編集事務をスムーズに進めるために、会員のご協力をよろしくお願ひしたいと思います。

第11号の編集については、以下のようなスケジュールに従って、従来通り進めていく予

定です。査読については、10号と同様、2回の査読を予定しています。査読の依頼を受けた会員諸氏のご協力をよろしくお願ひいたします。

8月26日 原稿締め切り

8月31日 編集委員会査読者決定・査読依頼

9月24日 査読の結果報告締め切り

9月28日 編集委員会執筆者への査読結果連絡、必要があれば、修正依頼など

11月5日 修正された原稿締め切り日/必要があれば、査読者への再度の査読依頼

12月2日 二度目の査読の結果報告締め切り日

12月7日 編集委員会必要があれば、コメントをつけた上で執筆者に最終原稿の執筆

依頼

1月上旬 原稿の最終締め切り/印刷屋さんに依頼

校正（1回のみ）

2月末から3月初 最終の印刷開始

3月末 学会大会で配布

論文等の送付先は以下にお願いします。

吹田市山田丘1-2 大阪大学人間科学部伊藤研究室気付

『スポーツ社会学研究編集委員会』

メールでの問い合わせは itou@hus.osaka-u.ac.jpまで

# 2001年度第3回理事会、第11回総会報告

2002年3月28日(土) 於九州大学

## 1) 2001年度第三回理事会報告

### 議題

#### (1) 各委員会報告及び審議事項

##### ・編集委員会 (別紙参照)

- ①『スポーツ社会学研究』第10巻発刊状況 (報告事項)
- ②編集委員会本年度決算 (承認)
- ③投稿規定の改正について (承認: 別紙参照)
- ④投稿数増加に伴う学会誌複数回発行について

財政負担を伴う問題ではあるが、実現の方向で継続して検討を行う旨議論。

##### ・研究委員会 (別紙参照)

- ①学会大会での特別講演とテーマセッションについて (報告事項)
- ②プロジェクト研究の経過報告、及び決算 (承認)
- ③研究委員会本年度決算 (承認)

##### ・HP委員会

- ①本年度事業報告 (報告事項)

##### ・国際交流委員会

- ①本年度事業報告 (報告事項)

##### ・事務局

- ①会員動向及び会費納入状況 (新入会員承認を含む)

新入会員承認 (後半期12名)。協賛会員、購読会員を含め学会会員数が400名に達した旨報告、および本年度会費納入状況が例年以上に悪化している旨報告。対応策について説明。

- ②本年度決算及び次年度予算案について (監査報告を含む: 審議事項、別紙)

承認。財政状況がやや悪化してきている点につき、今後検討を加える必要がある旨議論。

- ③新入会員の推薦者に関する規定改正について (承認: 別紙)

- ④他団体等の後援依頼の取り扱いについての内規 (審議事項)

今後他団体からの後援依頼が増えると予想されるので、以下のようにその取り扱いを定めた。

1. 後援は原則として「名義後援」のみとする。2. 趣旨及び大会等の性格等が判断しえるものの提出を条件とし、それにもとづき判断する。申し出の際、開催される大会等にて生ずる問題について本学会が一切の責任を負うものではない旨明記しても

らう。

2. 後援の諾否は理事会にて行うが、時期的に会議設定が不可能な場合、前記説明資料に基づき理事長、会長、事務局長が判断を行い、意見添付の上、インターネット等により各理事の了承を得るものとする。

- ⑤会報の一部電子情報化について (意見集約)

財政及び増大する事務局負担を考え、次年度以降会報の一部をインターネット、またホームページ掲載等で配布したい旨提案。具体的なプランとともに、本年従来の紙情報とともに電子情報化を試験的に行い、その反応を考慮の上、次回理事会で継続審議することとなった。

- ⑥その他

前記「他団体等の後援依頼の申し合わせ」に基づき、仙台大学より要請されていた国際シンポジウム「サッカーと社会」(2002.05.23)の名義後援を行う旨了承。

#### (2) 次期大会に関する事項

- ①学会大会概要 (報告事項)

- ②後援とスポンサーをとることについての承認  
計画等につき説明を受け、了承。

#### (3) その他

学術会議再登録の説明。

以上

## 2) 2001 (平成13) 年度総会報告

### 総会議題

#### (1) 本年度各部局活動報告 (各部局報告参照)

- ・研究部
- ・編集委員会
- ・海外交流委員会
- ・事務局  
会員動向および会費納入状況、会報発刊状況

#### (2) 審議事項

- ・2001 (平成13) 年度事業及び決算 (監査報告を含む: 別紙参照)  
本年度事業、および決算について説明。承認。  
(2001年度事業)

第11回学会大会開催 (九州大学)、総会開催 (大会時)、理事会 (3回開催、筑波、京都、九大)、『スポーツ社会学研究第10号』発刊、会報 (No.29、30、31) 発刊、研究プロジェクトの設置等。

- ・2002（平成14）年度事業計画及び予算（別紙参照）  
2002年度事業予定、および予算案について説明。了承。

（2002年度事業計画）

第12回学会大会開催（岡山大学）、総会開催（大会時）、理事会開催（2回を予定）『スポーツ社会学研究第11号』発刊、会報（No32, 33, 34）発刊、会報の一部電子情報化の検討、学会名簿の作成、研究プロジェクトの継続設置

- ・学会誌投稿規定の改則について（編集委員会）

新入会員は本会入会后6ヶ月経て学会誌投稿の権利が発生する旨、投稿規程の改則について提案。承認

- ・新入会員の推薦者に関わる規約改正について（事務局）

別紙のように、入会にあたり推薦人は正会員に限るとした学会規約改正案について提案。承認。

(3) その他

- ・会報の一部を電子情報化の方向で検討する旨報告。秋に具体案を提示したい旨報告。
- ・本年度名簿を改定する旨報告。協力依頼。

以上

## 2002 年度 予 算 書

2001年3月28日学会総会承認

収入の部：1,784,028円

支出の部：1,784,028円

差引残高：0円

### 1. 収入の部

項 目	金 額	備 考
繰 越 金	64,028	前年度繰越金
会 費	1,600,000	
そ の 他	120,000	広告費、機関誌売り上げ等
合 計	1,784,028	

### 2. 支出の部

項 目	金 額	備 考
機 関 誌 関 係	700,000	機関誌印刷・編集費
会 報 関 係	200,000	会報印刷・編集費
通 信 事 務 費	250,000	会報郵送費等
理 事 会 経 費	120,000	理事会交通費等
事 務 局 作 業 費	20,000	作業補助・文具
研 究 委 員 会	200,000	プロジェクト経費含
学 会 大 会 補 助	100,000	
名 簿 作 成	60,000	印刷・編集費
そ の 他	15,000	振り込み手数料・広告費
予 備 費	119,028	慶弔費等
合 計	1,784,028	

# 平成13年度決算書

収入の部：1,992,339円  
 支出の部：1,928,311円  
 差引残高：64,028円

## 1. 収入の部

項目	金額	人(件)費	昨年比
正会員費	1,055,000	186名	▼
学生購読会員費	216,000	53名+図書館7	▼
機関誌売上げ	12,166	7冊	▼
広告費	90,000	3件	△
利子収入	410		
前年度繰越金	618,763		
合計	1,992,339		▼

## 2. 支出の部

項目	金額	備考	昨年比
機関誌関係	700,000	印刷費、編集費	
会報関係	305,195	印刷費 (No29 - 31)	△
通信事務費	240,220	会報、機関誌等郵送費、事務郵送費	▼
理事会経費	286,500	交通補助、研究委員会経費	△
事務局作業費	19,231	作業補助(事務・会報等)文具等	▼
学会大会補助	100,000	第12回大会事務局への補助	
その他	3,915	振り込み手数料等	
予備費	273,250	慶弔費・プロジェクト費・封筒印刷費・広告費	△
合計	1,928,311		△

上記収支決算書を審査した結果、正確なものであることを認め、

平成14年3月21日 宮内 孝知

平成14年3月21日 天野 郡子

# 事務局からのお知らせ

フランスから投稿依頼です

以下のような連絡が事務局に届きました。投稿ご希望の方はご連絡ください。

APPEAL to CONTRIBUTIONS

Sport and Societies

The Centre of the Caribbeans Studies researches began the editorial staff an entitled work Sport and Societies. Thematic approached are the following ones: sociology of the sport, the body; women and sport, Physical activity; institutions were connected with the body and with the sport, sports and cultural media); sport/body/power.; sport and education; sport and culture.

Any contribution should reach me at the latest on October 15, 2002 by email.

Rosan. Rauzduel @wanadoo.fr. The rates should be included between 15 and 25 pages in French, in English or in Spanish.

## 会 員 動 向

### 住所・所属変更

氏 名	住所・E-mail	所 属
坂 なつこ		一橋大学社会学部

小笠原博毅

田中研之輔

一橋大学大学院社会学研究科

海老島 均

北口 節子

読売新聞高知支局

吉田 毅

東北工業大学人間科学センター

### 新入会員

荒井 啓子

学習院女子大学

池本 淳一

大阪大学大学院

上柿 和生

(株)スポーツデザイン研究所

畝木真由美

岡山大学大学院

江後 大樹

宇都宮大学大学院

嘉納 もも

京都女子大学

桜井 学

順天堂大学大学院

澤井 和彦

東京大学大学院

周 典芳

大阪大学大学院

田中 東子

早稲田大学大学院

藤井 雅人

福岡大学

## 編集後記

不手際が重なり、発行が予定を大幅に遅れました。(ワールド・カップ呆けも、多少は関係してるかも。) みなさまには、大変なご迷惑をおかけしたことをお詫びします。猛烈反省しています。

ヨーロッパからの帰り、飛行機の旅を満喫しました。ウイーンを発って、ポーランド・ベラルーシの穀倉地帯、ボルガ河、シベリアの森林地帯、モンゴルの荒涼とした大地、東シナ海、韓国東海岸を経て、日本海から日本上空へ。眼下をぼんやりと眺めていると、懐かしい景色。何と、故郷の上空を飛んでいました。思わず、携帯電話を探してしまいました。空から「線」の旅ができたのは貴重な体験でした。(HiJimmy)

日本スポーツ社会学会会報 第32号 2002年7月26日発行

日本スポーツ社会学会事務局 (立命館大学・産業社会学部内)

◎学会への連絡、入退会、住所・所属変更、会費納入、その他の各種手続き

〒603-8577  
京都市北区等持院北町56-1  
立命館大学・産業社会学部内  
日本スポーツ社会学会事務局 山下高行(理事・事務局長)、川口晋一

◎会報への投稿等

〒520-0862  
滋賀県大津市平津2-5-1  
滋賀大学・教育学部  
平井 肇(理事・会報担当)

◎学会のホームページ

日本スポーツ社会学会ホームページ  
<http://sport.kyokyo-u.ac.jp/jsss/jssshp.htm>  
web master: 杉本厚夫(理事・HP委員長)



# 入会申し込み書

(※事務局へご返送願います)

ふりがな 氏名：	会員種別 (どちらかを○で囲む) 正会員 ・ 学生会員
紹介者： (推薦人) ※必ず記入してください	専門分野：
勤務(所属)先：	
勤務(所属)先住所： 〒 TEL： FAX：	
自宅住所： 〒 TEL： FAX： ※任意です	
郵便物の発送先 (どちらかを○で囲む) 勤務(所属)先 ・ 自宅	
E-mail： ※任意です	

鈴木秀人

1300円

# 変貌する英国パブリックスクール

●スポーツ教育から見た現在 課外スポーツ活動と体育授業。スポーツをめぐる二つの教育実践から、エリート学校のリアルな姿を描く。

A・ホール 飯田貴子・吉川康夫監訳

2600円

# フットボール・スポーツ・身体

スポーツのシミュレーション「ボディ・スポーツ」体育教師・学生やスポーツをしている女性たちに向けて、スポーツとシミュレーションを巡る言説を読み解く。

井上 俊

1900円

# スポーツと美術の社会学

「芸術」型文化としてのスポーツを追う。スポーツ、武道、芸術、物語をつなぐユニークな視点に立つ。文化社会学の可能性を探る試み。

杉本厚夫編

1300円

# 体育教育を学ぶ人のために

わが国の近代化の過程で生まれた体育教育は、近代的身体とエトスの形成にその力を注いできた。体育教育の歩みとこれからを考える。

井上 俊・亀山佳明編

1300円

# スポーツ文化を学ぶ人のために

文化として、様々な形で人々を深くかかっているスポーツ。その関係を読み解く視点をわかりやすく提示し、スポーツ文化研究の基礎を築く文獻。

2200円

## 松田恵示 交叉する身体と遊び

あいまいさの文化社会学

身体と遊びがまじりあうポップな日常を、あいまいさの中のバランスというユニークな視点で考察

1900円

## 平井 肇編 スポーツで読むアジア

グローバル化、ネーションとエスニシティ、都市化など、アジアスポーツに多面的に接近する。アジアスポーツ比較社会学事始めの一冊

2000円

## 井上 俊編 新版 現代文化を学ぶ人のために

映画、音楽、文学、ジャーナリズム、旅行、恋愛、ファッション、スポーツなど、多様な側面から時代のドラマを照らし出す「現代文化論」

2233円

## J・リーヴァー 亀山佳明・西山けい子訳 サッカー狂の社会学

ブラジルの社会とスポーツ

W杯を四度制覇したブラジル・サッカーの強さの秘密を社会学の視点から考察した貴重な一冊

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56 ☎075(721)6506  
http://www.sekaishisosha.co.jp <消費税別>